

あとがき

われわれ日本人は、アラブ・イスラムに関する情報を基本的に常に欧米に頼ってきた。日本人が直接アラブと接触する機会がほとんどなかったうちは、それも仕方のないことだったのかもしれない。しかし欧米のアラブ・イスラム観は彼ら自身の価値観を映した色眼鏡を通したものののである。その色眼鏡はヨーロッパとアラブ、キリスト教とイスラム教の対立という歴史的な背景から発生したもので「敵」としてのアラブ観が色濃い。「不可解なアラブ」「わかりにくいアラブ」という先入観もここから発する。そうした歴史的経緯をもたないわれわれは、わざわざそうした色眼鏡を借りる必要はないはずである。それに、世界地図を開いてみるまでもなく、アラブ世界は日本とヨーロッパの間にあるのだ。わざわざ向こう側から見ることもない。われわれ自身の目で直接見ればいいのだ。

もちろん、日本にもアラブ研究者は増えてきているし、アラブを直接見聞きしてきた日本人も増えている。これに応じてアラブについて書かれた本も増えている。ただ、日本ではアラブというとエジプトやアラビア半島の産油国に関する情報が多く、そうした情報に基づいて日本なりの「アラブ」観というものができあがりつつある。そしてそこにもまた、さまざまな先入観が紛れ込んでいるように思う。カイロの雑踏の中のアラブ人、砂漠をラクダとともに旅するアラブ人、自家用ジェット機に乗る石油成金のアラブ人などについての記述は、こうしたお馴染みのステレオタイプを再生産する。もちろんそれだって真つ赤な嘘だというわけではない。しかしそうでないアラビアもあるのだ。

学術書から駐在員の随想録までアラブに関するいろいろな本を読み、その中でアラブ一般を理解しようとしている部分になると、ぼくはいつもイエメンがカヤの外に置かれているような気がしてならなかった。はつきりいえば「アラブの田舎」イエメンなんてマイナーな扱いしか受けてこなかったのである。これは日本人だけが悪いのではない。同じアラブ人であってもエジプト人はイエメンについてあんまり興味もないし知識もない。カイロの庶民はイギリスやフランスのほうをよっぽどよく知っている。

しかし、だからといってイエメンがアラブ理解に重要でないかということとそんなことはないと思う。われわれの持っている既成のアラブ観やステレオタイプでは理解できない部分がイエメ

ンにはいくつもあり、そこがイエメンのおもしろさである。

「砂漠でないアラビア」「雄弁でないアラビア」「石油大国でないアラビア」そんな「もう一つのアラビア」がイエメンである。そして、もしかするとこの「もう一つのアラビア」の中にこれまでわれわれが見落としてきたアラブ理解の重要な鍵が隠されているかもしれない。

「わかりにくいアラブ」というステレオタイプを離れてみれば、ぼくはアラブのなかでもイエメンという国と人々は、日本人にはずいぶんわかりやすい部分が多いのではないかと思っている。このぼくのおしゃべりがみなさんのイエメン理解、そしてアラブ理解の一助になれば幸いである。

一九九三年秋

著者

70 「はかり」と「くらし」 第三世界の度量衡

小島麗逸／大岩川嫩編 ●日本図書館協会選定図書

発展途上国のくらしに根ざした度量衡の多様な実態を、三十数名の地域研究者が体験的に論じ、解明する。第三世界の地域理解に必須の手引である。写真・図版多数。一九八六年刊

73 「こよみ」と「くらし」 第三世界の労働リズム

小島麗逸／大岩川嫩編 ●日本図書館協会選定図書

三十数途上国の生産と生活のリズムを、地域研究者の眼で風土に根ざした多様な「暦」の世界に探る。巧まざる文明批評。写真・図版多数。一九八七年刊

78 「すまい」と「くらし」 第三世界の住居問題

堀井健三／大岩川嫩編

伝統的な途上国の庶民の住居は、近代化の波に洗われて変貌しつつある。都市のスラムに農村の集落に、その多様な実態を国別に浮き彫りにする。一九八九年刊

80 「のりもの」と「くらし」 第三世界の交通機関

吉田昌夫／大岩川嫩編

ベチャから飛行機まで——途上国の人々の暮らしの足として、経済活動の動脈として活躍する多様な交通機関のあり方を興趣豊かに解説する35編。一九九〇年刊

85 「たべものや」と「くらし」 第三世界の外食産業

岩崎輝行／大岩川嫩編

民衆のエネルギーの源泉である食の世界を、「外食」のありようから楽しくそして鋭く描き出す40編。途上国理解にも旅行者のハンドブックにもすぐれて有用。一九九二年刊

88 「きもの」と「くらし」 第三世界の日常着

宮治一雄／大岩川嫩編

風土ばかりか、体制に順応しあるいは反逆して、人々は日常の服装を変える。発展途上国の多様な歴史と生活のなかで繰り上げられる着衣のドラマ三十数編。一九九三年刊

45 中東雑記

林 武著

著者の現地生活を基盤に、日本人には把握しがたいと思われている中東の政治、風俗・生活、宗教を具体的に、読み物ふうに語って飽きさせない。

一九七三年刊

52 アフガニスタンとイラン 人とこころ

津田元一郎著

古来、東洋と西洋とを結ぶ要路にあり、現在、国際紛争の焦点に立つ両国の国民性、価値観、行動のバターン等を著者の現地体験をふまえて説明する。

一九七七年刊

56 現代エジプト論

中岡三益著

アラブ社会主義の旗手として注目を集めたエジプトが挫折をへて、転換した過程の考察を軸に、国際社会の中で模索する中東諸国の姿を分析する。

一九七九年刊

67 中東の開発と統合

宮治一雄編

一九七〇年代の経済開発政策の現在への影響を政治統合と社会統合の視点から具体的な事例により検討し、その将来を展望する。

一九八五年刊

79 中東 国境を越える経済

宮治一雄編

●日本図書館協会選定図書

中東主要国・地域の最近の動向の中からレバノン内戦、イスラム金融、出稼ぎ問題等、八つの代表的問題を選び、中東安定化の基本的な方向を探る。

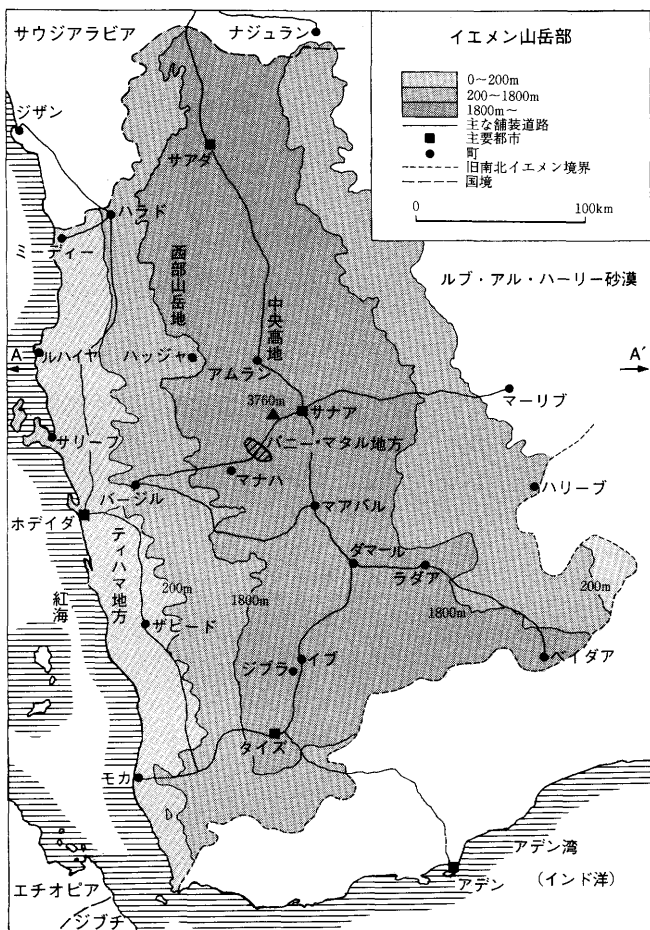
一九八九年刊

83 門戸開放政策下のエジプト経済

鈴木弘明編

貧困の克服こそ今日、第三世界最大の課題である。門戸開放政策の実施以降、現時点に至るまでの経済構造の基礎的要素の変化と問題点を分析する。

一九九一年刊



〔カバー写真〕
表…イエメン山岳地方の段々畑
裏…サナア旧市街のまちなみ

地中海から太平洋まで、この広くアジアと呼ばれる地帯には幾十かの国がある。その大部分は第二次世界大戦以後、古い植民地体制から脱して新興の独立国となったものである。世界の人口の半ば以上のものがここにゐる。これらの新興国はそれぞれの立場に立って、建国創業の仕事に力をつくしている。

その業は果たして障害なく着々と進んでゐるか。だれもがこれに対して頭をかしげるであらう。そしてだれもがアジアは「流動的」であるという。

流動的とは何であるか。また何でないか。いくたの混みいった事態のなかを、一本の金の線が生々發展的に縫っているのも流動的である。経済は着々と成長し、政治は一つの体制のなかで徐々に整備されているような場合がそれである。

アジア諸国の大部分については、事態はこのように簡単ではない。もちろん、経済の場面には大きな発展・成長の芽生えはある。しかし、他面においてそれを抑制するものが力づよい。またおよそ発展や成長を考へる場合、在来流行の理解によるパターンを以てするのが果たして正しいか、との疑問もでてくる。さらに政治体制については、イデオロギーの対立、複合民族国家における特殊なナショナリズムに伴う民族や種族間の闘争があつて、政治的安定はなかなか期すべくもない。独立国家の幼年期に伴う政治的、行政的未熟もまた考へられるべき大きな原因である。

こういう次第で、アジアが流動的であるとは、一つの混沌を意味するものといえようか。そしてその上に立っていかなる経済・社会・政治の体制が整いだされるであらうか。——この意味で二〇世紀後半のアジアは世界における「問題」、いな最も大きな「問題」である。

アジア経済研究所は、まさにこの「問題」の理解に向かつて、ひたすら前進をつづけている。われわれの期するところは、まさにそれぞれの国の現実に即した精確な知識を供しよう、そしてこの大きな「問題」について静かなサービスをいたそうとするに尽きる。設立以来すでに七十年余り、専らそういう道を歩んできたし、今後もそれに変わりはしない。このシリーズは、多くの研究や調査の報告書、現地調査を土台として、アジアについての解説書・教養書たることを目標とするものである。

一九六六年三月